

にほんの里100選 山之村のフットパスを歩いた

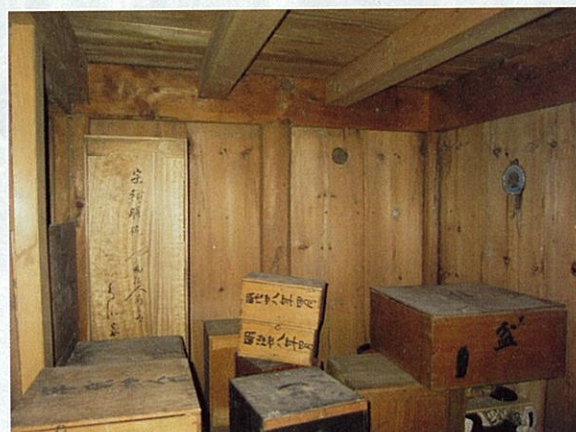


「山之村」フットパスの1日が終わった。宿へ向かう参加者たち



ガマで編んだ「ネコダ」

板倉の屋根に使われていたクリの樽板を利用した板塀



板倉(上)とその内部(下)

いたるところに薪(「春木」という)が積まれている。手前の柴は、えんどう豆の「手」。山之村は寒いので竹がほとんど育たない



梶屋照男さんお手製のかんじき。杵はクロモジ、爪はミスナラ

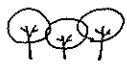


「子どものころこの地蔵さんをソリにしてよく遊んだもんだ」。「すべり地蔵」の話をする仲田彦春さん(73)。地蔵さんの材はサワラ

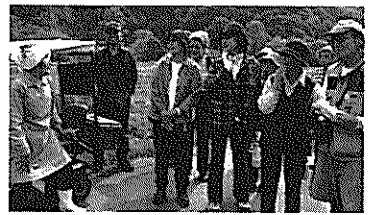


山菜は村の大事な販売品だ。ゼンマイ(左上)、ヒメタケ(ネマガリタケ；左下)、干しワラビ





風土と生きる 「山之村」フットパスの旅



下林津谷子さんとホウレンソウ畑の前

森林文化協会と朝日新聞社が2009年1月に発表した「にほんの里100選」の里を訪ねるフットパス(里の道)の旅も、今回の岐阜県神岡町山之村で25カ所目になった。6月初旬、里の人たちと相談して決めた「道」を、18人の参加者と歩いた。

集落の中の道、あぜ道、裏山の峠道……。「里の道」を歩いて目にする風景は緑いっぱい、野鳥や蛙や、蝶や蜂など命にあふれ、あるいは夏なのかさ高くきつしり積まれた薪に冬の厳しさが偲ばれて、都会の参加者には感慨深いものがあった。

■風土産業

旅は、自然と向き合い、自然の恵みを糧に生きる里の人たちとの出会いでもあった。

2日間、ずっと同行して里の自然と暮らしの様子を話してくれた石橋智さん(42)。静岡県出身で山之村に家族で暮らし始めて7年目。「山村留学」で都会から子どもたちを受け入れ、里の自然をまるごと使った自然学校を続けている。2月、雪が積もる冬の暮らしのこと、民家の造りのこと、道ばたの草木と日常生活のことなど話す語り口は、すでに山之村の風土や歴史が石橋さんの血となり肉となつているかのようリアリティーがあった。

あさつて出荷だというホウレンソウ畑の前で話をしてくれた下林津谷子さん(81)。5反

(50ア)の田んぼをホウレンソウの畑に変えて35年になる。標高900mの山之村の冷涼な気候風土に合ったホウレンソウは、地域の大きな産業になった。6、10月にかけて年4、5回収穫して出荷する。「冬は？」と問うと、「寒干し大根やさ」と下林さん。

大根は8月中旬、下旬に種をまき、10月下旬に収穫、土中のムロに保存して、気温がぐんと下がる寒の入り(正月6日頃)に「干す」作業が始まる。皮をむいて2センチほどの厚さに輪切りにした大根を釜で茹で、20個をひとまとめにして串を差し、軒先に吊るす。氷点下10度以下の外気で凍った大根は、日中に解けて水分が抜けていく。凍る・解けるを繰り返す、ひと月ほどでフリーズドライ状態の寒干し大根が出来上がる。自給用の保存食だったのを、25年前に地域のみんなで工夫して商品化した。下林さんはひと冬に150、200kgの乾燥製品を農協に出荷するという。山之村の冬の寒さが生んだ、まさに「風土産業」だ。07年度「食アメニティコンテスト」では農林水産大臣賞を受けた。

■伝統

山之村は、7つの集落に約80戸、2000人が暮らしている。そのぜんぶの集落が見渡せるといって虚空蔵山。山頂に梶屋照男さん(72)、静江さん(73)夫妻がいた。山の上は平らになつていて、大きな松が一本生えている。根元は一面、ツツジ科の低木、アカモノが地面を覆い、その真つ白な花に包まれるように虚空蔵菩薩の祠があった。もうすぐ行われる祭りに備え、梶屋さんはその手入れ中だった。

静江さんは藁か何かで編んだ見栄えのよい袋を背負っていた。中には鎌や鉈が入っている。「ネコダ」といって、昔はみんな普通に使っていた背負い袋だという。素材はガマ(蒲)。9月ごろに茎を刈り取って乾かし、細く裂いて編む。もう30年も使っているというから何という丈夫さだろう。しかも美しい。参加者の誰かが「作れば売れるんじゃない」と言った。材料のガマは、水田跡などにたくさん生えている。案外よいアイデアかもしれないと思った。梶屋さんには山を下りてからも自宅の庭でお茶をごちそうになった。母屋は山之村でもほとんど見られなくなった茅葺きだ。伝統的な「板倉」もあった。

板倉は、穀類や什器、予備の寝具などを保管する倉庫だ。母屋が火事になつても類焼を避けられるよう、少し離れたところに建てられている。半間(90センチ)間隔の柱に貫が通り、壁になる杉板が内側から張つてある。切り妻で、風雨を避けるため庇が長いのが特徴だ。シンプルだが頑丈で、きりつとした意匠が好ましい。取り壊されたり、補修でトタンを張つたものも少なくないが、板倉はそれでも山之村の風景には欠かせない存在だ。

山の杉や松や栗で大地から生えた「樹」のような建物を建て、土地に生えた草を編み、雑木の薪でエネルギーを補充し、風土に合った作物を栽培して加工を工夫する——。自然と交流し、自然の恵みを糧に生きるとはこういうことなのか。町住まいの私たちが失ってしまった暮らし方の原点を見た思いがした。

◇山之村の様子はHP「天空の牧場 山之村」
<http://www.yamanomura-mahelp.jp/>。